

蓮輪 賢治 (はすわ・けんじ) 様 インタビュー

はじめに

(会長) 本日は大阪大学工業会の「各界で活躍されている卒業生への会長インタビュー」のためにお時間をいただきありがとうございます。それではよろしく願い申し上げます。

大阪大学工業会にとって、同窓生が各界で活躍されることは、同窓会会員としても誇りであると共に、その活躍の見える化で、母校の価値を高めることにも寄与できると考えております。大阪大学工業会では、ホームページを充実させて、情報発信機能を更に高めると共に、同窓生間の交流の場としても活用されるように改編を進めておりますが、同窓生で各界にてご活躍の方々に、会長自らがインタビューを行い、同窓生の大学への想い、各界で活躍の原点や努力の源などをお聞きし、同窓生各位の今後の活躍や目標へのある種の触発を誘起するようなお話をお伺いすることにいたしました。



本日は、その記念すべき第1回目のインタビューとして、株式会社大林組代表取締役の蓮輪賢治社長様にお話を伺いたく存じます。

蓮輪社長様のご経歴については、添付資料でご紹介いたしていますが、1977年に大阪大学工学部土木工学科を卒業後、同年株式会社大林組に入社され、数々のご経歴のように重責を担われた後、2018年3月に社長に就任されております。

希望に燃えて大阪大学工学部へ：土木工学への道を

(会長) 本日は、今年1月に移られたという、新しいコンセプトのビルで、エレベーターを降りると木の香りがする大阪本店にお伺いしました。

はじめに、社長様は1973年(昭和48年)に大阪大学に入学されてはいますが、大阪大学を目指された動機などをお伺いします。

(蓮輪社長) 大阪大学を目指した一番の理由は、家庭の事情もあって自宅から通学できる範囲内、それに当時の国立大学一期校ということになると「大阪大学」ということでした。国立大学ということで他の選択肢も考えられましたが、時間距離という点では大阪大学にということで選択しました。当時は交通ネットワークもそれほど良くなく、通学のしやすさということは大きなポイントでした。

(会長) そこで、工学部で、しかも当時は20学科ほどあった中で、土木工学科を選択されたのはどうしてでしょうか。

(蓮輪社長) それはですね、こじつけではないのですが、大学後の将来において自分が何をやりたいのかと考えたときに、小さいときの想いがよぎった結果でした。小学校時代に既に、何か大きなものを造るという「ものづくり」に興味があり、ものづくりということになると「工学部」であろうと思いました。工学分野でものづくりといえど、かなり広範囲で海洋工学などいろいろなものづくり分野が考えられま

したが、ちょうど私が大学受験したときは高度成長期のまっただ中であって、列島改造論などが叫ばれた時代でもあって、建設系が脚光を浴びておりました。いまと違って、当時の建設系は一番華やかな時代でもあった時代の背景と、小さいときからのものづくりへの憧れもあって、土木工学を選んだということです。

(会長) 私は社長様より前になりますが、経済的な理由もあって、自宅から通えることと、最も大事なポイントは授業料の安さで、国立大の選択は必須条件でした。

社長さんの時代は、授業料いくらでしたか。

(運輸社長) 確か、前年に値上げされて、年間 36,000 円だったかと思います。それでもかなり安かったという印象です。

(会長) 私の時代は 12,000 円で月 1,000 円ということで、国立大学は、それほど裕福でない家庭にとっても授業料の安さは魅力で、その魅力は人財を集めることにもつながっていたかと思いますが。

(運輸社長) そうですね、私もたまたま父親を早く亡くしたもので、国立大学は経済的な魅力でもありまし、国立大学の価値が感じられましたね。

### 土木工学の面白さから河川工学の道へ

(会長) このような動機もあって、大学に入られましたが、まだ、教養部があった時代かと思いますが、大学へ入学されて大学教育で印象深かったことは何かありますか。

(運輸社長) 大学に入って、1 年で講義を受けて、なんと学生の数が多いことのか、また、先生や職員の数も多く、それに、キャンパスの広さなど、やはりその規模にびっくりしました。単純にそれが、「大学ってすごいなあ」という驚きの印象でした。

(会長) 工学部では、1 年半後に学部に移って、工学、特に土木工学の勉強をされたわけですが、その内容は、当初の想いのままでしたか。

(運輸社長) そうですね、教養の時に学部から先生がこられて、**土木工学概論**だったかと思いますが、土木工学全般を見るような講義では、その当時の橋梁などの構造物や、耳にする、あるいは目にするようなモニュメント的な構造などの紹介には「わくわく」しました。

ところが、専門に進んで北千里に行って講義を受けると、一つ一つがもう専門的で細分化されすぎてしまっていて、構造力学やコンクリート工学や河川工学などの講義を聴いて面食らってしまったというのが実感でした。ただ、正直なんとなく**面白い**なとも感じたのも事実です。

(会長) 専門課程では、その後 4 年生で研究室を選択し卒業研究を行うことになるのですが、結局どの研究室を選ばれたのでしょうか。

(運輸社長) 面食らいながらも、結果的に河川工学を目指すことになり、当時の室田教授の研究室に入ることになりました。助教授が村岡先生でした。

## 工学部の醍醐味：卒業研究の意義

(会長) 研究室に入られて、河川工学という点では、我が国でも制御が必要な非常に重要な分野ですが、どのような印象が残っておられますか。

(運輸社長) 卒業研究では、中辻先生にテーマをいただき、熱心にご指導いただきました。内容は、均一な密度の流れの中に密度の異なる流れが入ったときにどのような挙動をするかの基礎研究でした。模型を造って流れの実験を行ったのですが、実験の地味さを感じつつも、少なくとも小学校からそれまで、このような**特定のテーマに関する研究という取組**は行ったことがなかったので、非常に興味深く、何か学術的な面で大きな成果をあげられたか否かはともかくも、大学にて研究という取組を行ったことは、大学生活でしかできない経験として、今でも非常に有難かったと思っています。

(会長) そうですね、特に工学部では4年生で卒業研究を行うことが必修になっており、それまでの座学や与えられた内容の学生実験と異なり、自ら考え、新しい課題に取り組み、実験・解析を行うこと、また、そのために先人の研究や論文を読み込むことなど、一つの目標に向かってのアプローチの仕方を学ぶ良い機会でもあります。経験的には、4年生になると人が変わったように成長する姿が見られ、一つのことに積極的に取り組むこと、これこそ**工学部のもつ大きな意義**かも知れません。

(運輸社長) そうですね、研究室に入ると、同じ研究分野での先輩後輩の**縦**のつながりができ、同じ工学分野の同級生の**横**のつながりとで、縦糸と横糸のつながりができることも大きな特徴で、企業に入ってもこの繋がりが有難いこともあります。

## ビッグプロジェクトが人を育てる

(会長) 私は溶接工学科でしたが、土木分野の先生ともつながりが多く、特に鋼構造分野の前田先生などには、学会でもお世話になりましたし、学生時代に、前田先生は世界中の橋の写真を撮っておられて、素晴らしいスライドを見せて頂いたことがありました。写真を趣味にしている今にあって、前田先生が写真の構図にこだわっておられ、いろいろと教えて頂いたことを活かすべく努力しています。その当時の先生方の姿が、まさに大先生という印象でした。

ところで、研究しておられた当時は、まだ、本四連絡橋建設に取りかかっていなかった時代ですね。

(運輸社長) そうです。まだまだ計画段階で、入社したときは社内でも目立った動きはなかったのですが、土木を目指すものにとって、**本四連絡橋**は大きなエポックでした。

本四連絡橋の企画が進み、どのような設計にするか、材料はどうする、など、土木技術者には夢があったように思います。このような**夢のある仕事**があることが、土木技術を目指す若い人々にとっても、実に良いことだと思います。

(会長) そうですね。我々は鋼構造が専門でしたから、本四連絡橋では軽量化のために高強度鋼を使わなければならない、いろいろな使用条件から、どこまで強度を高めた鋼材が使えるかなど、**一時代の研究課題**であり、それで鋼構造技術者が育ったともいえます。夢があったということでしょうか。

(運輸社長) このようなエポックな事業は、技術者を育成には不可欠ですね。実作業に従事している技

術者・研究者が「おもしろい」と感じる事が良い仕事の条件でしょうね。

私が卒業する頃には、重工業や造船メーカー、製鉄メーカーら各社に橋梁部門があり、卒業生も橋梁設計や施工を目指して就職するひとが多かったように思います。

(会長) 大阪にも、橋梁専門メーカーが多くあって、それぞれに本四などの橋梁設計・施工に重要な役割を果たしてこられたのですが、最近では、目立った橋梁工事もほとんどなく、合併などもあって技術者が離散している傾向が見られることは残念でもあります。

(運輸社長) ただ、鋼構造の分野では、まだまだ必要な「もの」がもあり、更なる技術の向上を望みたいですね。

その意味でも、若い技術者をわくわくさせる話題やプロジェクトが望まれますね。

### 人のつながりを育む大学時代：大学時代の時間をどう使う

(会長) ところで、大学時代で課外活動のような形で何かされていましたか。

(運輸社長) 大学では、特に、クラブ活動のような課外活動はしませんでした。大阪大学は石橋にしろ北千里にしろ、市内からでも結構な通学時間もかかり、学費の問題もありアルバイトもしなければならぬということなのでクラブ活動は行いませんでした。

アルバイトは家庭教師で、多くは近所のお子さん達で、中学・高校生レベルということになると、やはりそれほど遅くにといいわけにはいかないので、決まったクラブ活動は難しいのが現状でした。

(会長) そのような学生生活で、特に印象に残ったことや、こうしておけば良かったなどを感じられたことはありますか。

(運輸社長) こうしておけば良かったということではないのですが、大学生活とは社会人生活のプロローグというのでしょうか、初めて収入を得ることもでき、自分で生活スタイルを決定できること、また、学生でも飲み屋さんのようなところに入りができ、社会人になるための予行演習的なことができたことなどは、大学生活としての意義があったと思います。

もちろん、飲みに行くなどは一人で行くわけではなく、友達と共に行くわけで、あるときは議論を深めることで、ある意味生涯の友として深めることができるなどは大学生活の大きな意義ではないでしょうか。また、当時は今と違って喫茶店が一般的で、そこで友達といろいろな話や議論をしたことは今にもつながっている感じがします。

時間の過ごし方について、今の学生さんが少し我々の時代と違う使い方と感ずることがあります。就職時のエントリーシートを見ると、例えば居酒屋でホール担当していましたなどが書かれているのが結構多く見られます。それ自体を否定するわけではないのですが、折角の学生時代の時間を、もう少し生産的な使い方できないのかと感ずることがあります。現在のアルバイト市場が、学生アルバイトに頼るところがあるのかも知れませんが、我々の時代との違いを感ずますね。

やはり、折角の大学時代を有効に費やすための金と時間の使い方をうまくマネージすることは、学生時代も社会に出てからの将来も重要なポイントでしょう。

(運輸社長) もう一つ、このような時間の使い方から見て、最近では学生間の交流が少ないように感ずま

す。同世代の友達と交流することは、社会に出てからも役立つことでしょう。最近の学生は同期の仲間と行動をするということはあまりしてないのではないかと感じています。遊んでいるようですが、友との交流は社会に出てからも非常に有益になることだと思いますね。

### 株式会社大林組への入社と建設業の本質への戸惑い

(会長) このようにして大学時代を過ごされ、就職されることになったのですが、株式会社大林組に入られたきっかけや何かを目指されたということでしょうか。

(運輸社長) 就職に関しては、当時は、工学部の他の学科でも同じような状況だったと思いますが、基本的には、勿論簡易な希望のアンケートみたいなのは出してありますが、どこに行きたいのかというよりは、学科長たる就職担当の先生方の差配で決まるような状態で、今みたいに勝手にエントリーシートを書いてどんどんフリーに行ける時代ではなかったのです。また、私の世代の特異点かもしれませんが、77年というのは本当に**就職氷河期**まっただ中でした。おそらく76年、77年が一番底ぐらだったと思われる。結果的に私も入社したときの大林組の採用者は40数名で、現在の352名と比べても、極端に少ない時代でした。その意味で、大学院に行かずに就職を希望していた我々にとっては本当に大変な時代だったのです。

そんな中でも、橋梁工学を学んだ人たちはどうしても橋梁を作りたいという希望が明確だったと思うのですが、私が所属する河川工学という分野は、特定の構造があるわけではなく、就職先が特定されにくいということが特徴でした。ただし、治水という視点から国家公務員や地方公務員を目指す人が多かったともいえます。ただ、概して大阪大学では公務員指向が高くなかったように思います。他の主要大学では国家公務員上級職用のカリキュラムがあって戦略的に国家公務員への就職率を増やそうとしているのに比べて、大学側の後押しもなかったと思います。

そのような事情もあってか、私は公務員にはあまり興味がなくて、親戚も商売人が多くて公務員などという話もなく、それじゃということで、俗っぽいですけどスーパーゼネコンと言われてる企業となりました。そんな中、私が名前を知っているのは大林組と竹中工務店ぐらいで、説明を受けてみると竹中工務店さんは建築が主流で、私は土木なので、結果的に大林組にご縁があって、これも就職担当の先生のおかげだと思っております。

(会長) 当時を振り返ってみると、確かに、就職を世話した当事者としては、先生方が強力に推薦したり、既に話がついていることなどもありましたが、溶接工学科などは、非常に得意な学科でもあり、求人の数は少なくとも、実際には規模の大きな会社のみでの求人です。やはり大阪大学だとの感じもありました。このステータスは大事なポイントかと思えます。



(会長) さて、このような事情から大林組へ入社されて、何か大きく変わったと感じられたことはあり

ましたか。

(運輸社長) そうですね、就職内定を頂いて、会社から、今もあります社内誌が定期的に送られてきて、それはそれで入社までわくわくしていたのですが、社に入ってみると、全然「月とスッポン」で、言葉選ばずにいうと「手元」のような状況でしたが、現実的には、それが下積みとなり、今も活かされていると思うのですが、大学時代に思っていたものとの違いに驚いたのも現実でした。

ただ、こと仕事の内容にしてみたら、決して大学で学んだことができるような世界でないというのが入社してきた若手の実感ではないでしょうか。

(運輸社長) 建設業が行う「ものづくり」というものは、ある意味「組み立て業」的なものであって、ゼネコンは労務力も、機械力を持ちませんので、本来はマネージャーの仕事なので、最終的にはたとえ新入社員といえども、マネジメント力が要請されているのです。そういう本質的な仕事の性格に関する知識が事前にはなく、入社してそのギャップに驚いたっていうのが実体なのです。

### 大きなプロジェクトでの経験と先輩からの学び：コミュニケーション力の大切さ

(会長) そのような状況の中で、入社後に取り組まれた大きなプロジェクトのようもので、苦勞された、あるいは得られたものがおありでしょうか。

(運輸社長) そうですね、入社時はまだまだ就職氷河期とはいえ、仕事量は豊富にあり、4月に入社して早速5月の連休明けくらいには、現場に配属されていました。それでもう、それこそ一兵卒としてやり始めていました。

配属されたのは、大阪本店管内でも比較的大きな現場でした。ただ、現場としては大きいのですが、自分の担当分野は、その中の切り取られた小さな部分でした。幸いにも、私が入社した2年ぐらい前までは、日本列島改造論の動きもあって、建設業界が脚光を浴びた時期で、多くの先輩が採用されていて、年の近い先輩達がチーム中に沢山おられました。それはすごく有難かったですね。例えば、院卒で1年前に入られた先輩は、年で3つほどしか違いませんでした。仲良くご指導いただきましたことは本当に有難かったです。

(会長) その現場の規模はかなり大きなプロジェクト現場だったのですか。

(運輸社長) 最初に配属された現場は鉄道高架橋の建設プロジェクトでした。その当時能勢電気軌道の「山下」という駅と、日生ニュータウンという造成までに鉄軌道の新設するプロジェクトの一部でした。当時は、宅地開発とゴルフ場建設が最盛期の現場の一つでした。日本生命さんが大きな資金を投入されて、日生ニュータウンを開発され、そこにわざわざ能勢電を自社の宅地造成現場まで乗り入れさせるというプロジェクトでした。今は、能勢電鉄も阪急系列に入れられ、日生中央駅から梅田まで直通の電車が運転されているかとおもいますが、当時は、能勢電はまだ乗降客も少ないところでした。そこに大きな宅地を開発し、能勢電の軌道を新しく引き入れ一大住宅地を建設するという、日生さんの大きな資金力がつぎ込まれたプロジェクトでした。

新しく軌道を引き区間には山岳トンネルもありましたし、開削のボックスカルバート工法などもありましたし、中間駅や終端駅の建設などもあり、そのような意味では、すごく大きな規模のプロジェクト現場で、それだけの規模の開発建設を日本生命さんから大林組に任せていただいたことは有難かったです。

当然日生ニュータウンの広大な土地造成も大林組が担っており、宅地造成の現場もあり、軌道建設などの現場もあるというように、長期間にわたっての仕事で、その当時大林組内でも有名な大現場の所長さんが取り仕切られました。

当時は、軌道建設だけでも4工区あり、全て大林組で、私はその内の第3工区に属しており、高架橋の部分を担当した次第です。

(会長) 私は土木技術者でもないのですが、揚水発電所の大きな建設現場の計画から完成までの間、施主側からの要請で、施工（特に水圧鉄管工事）管理のコンサル的な立場で10年間にわたってお付き合いさせていただいたことがあるのですが、土木工事は期間の長いプロジェクトであり、また、揚水発電所でも3工区制でしたが、建設に携わる多様で多くの人の管理とコミュニケーションの重要性を実感しました。

このような大きな現場で仕事をされて、何か一番感じられたことはありますか。

(運輸社長) そうですね、入社前まで、いわゆるゼネコンが労務力を持たない、いわゆる施工管理的な仕事で、もちろん施工管理の中には安全や品質管理もあれば、工程管理や予算管理もあります。ところが大学時代にはそのような知識もなく、いきなりそのような中にほうり込まれ、いわゆる「現場監督さん」などの監督者になってしまうのです。そうすると、技能者の人が多くおられるわけですが、その方々と直接話をするのでなく、彼らを取りまとめておられる職長さんなどと話をするのですが、かなり年配の方々や、いろいろな方がおられるので怒らせてもいけませんし、確実な伝達力・コミュニケーション術を身につけました、また、大林組の社内に戻れば、所長や、直ぐ上の先輩もおられ、やはりコミュニケーションの大切さを身をもって実感しました。

(会長) 土木関係の人々とお付き合いしたこともありますが、対応すべき人の範囲が多い感じで、確かにコミュニケーション力が大切と感じましたね。

(運輸社長) 建設系でも、建築は、割合と閉じた環境での仕事ですが、土木は軌道工事や宅地造成などを行うにしても、必ず地権者もおられますし、周辺の地域の人々と関係が無視できません。このように関係される人々の多さとその対応が大きな特徴といえ、それらへの対応力は不可欠といえましょう。

私も建築現場の所長をしたこともあり、地域との関係が皆無ではありませんが、囲いをしてしまうと、騒音や塵埃などの問題は解決していかなければなりません、客観的に見て、土木工事はやはり地域の皆様との関係の度合いがかなり違う感じがしますし、それだけコミュニケーションを怠ることがないようにしなければなりません。

### 事業経営の重要なポイントは：ステークスホルダーとの協調を考えた「バランス力」による個社の成長

(会長) いま、大林組の基盤である建設業における事業の遂行にとってコミュニケーション力の大切さなどについてはお伺いしましたが、現在代表取締役として事業経営に携わっておられるわけですが、事業経営者として一番重要なポイントはどこにあるとお考えでしょうか。

(運輸社長) そうですね、企業経営にとって大事な点はいろいろあるのですが、やはり一番大切なところは、「ステークスホルダー」と云われる多種多様な人々が沢山おられることを忘れない事だと思っています。当然、株式会社ですので、株主さんには、機関投資家の人たちがおられ、また、個人株主さんもお

られます。双方を大事にしなければなりません。一方で、経営的な観点からいえば、大林グループの従業員の皆さんや協力会社の皆さんも大切にしなければなりません。また、実務的なことをいえば、外部環境に目をやると、監督官庁との関係性や発注者など、いろいろな要因があり、基本的には、それらの「バランス」を考え、社会の変容の物差しを考慮しつつ、きちっとバランスを見失わないようにすることが重要でしょう。

このようなバランス感覚のもとで、個社としての成長をどのように実現していくのかという観点で、物事を見ていかなければならないと考えております。

このような観点で、昨今ステークスホルダーの中でも、従業員の皆さんの幸福、それにサプライチェーンの皆さん、人材や機器の提供者の協力会社、更には電気設備や空調設備、あるいは衛生設備など設備業者さんなどの発展も考えながら、個社の成長をどのように考え、どのような施策をとるのが、重要なポイントの一つかなと考えています。

### 経営者として若い人々に望むこと：働きがいと達成感を大切に

(会長) いまお話しいただいた経営者としての重要なポイントから、若手の社員や今後御社を目指す学生などへ望まれることは何でしょうか。

(運輸社長) 私個人としては是非、社会人として**働きがいのある生活**を送っていて欲しいと思っていますし、己にとって大切なこと、例えばご家族との時間とか、友達、その中には恋人もおられるでしょうが、そんな仲間との時間、あるいは自分の趣味の時間、例えば、スポーツであったり観劇であったり、他にも旅行などの趣味の時間など、そういう自分の時間も大切にしながら、社会人としての働きがいを感じながら、その双方を両立されるために、いったい自分がどのようなスキルを身に付け、それを振る舞えるようになるのが大切で、何か言われてやるんじゃないで、自分のそういう姿で得られる**果実としての自分の時間**を明るく調整してほしいなと思いますね。

(会長) そのバランスが一番に難しいところでしょうが、だからこそ自らの達成観があり、考えていただきたいということですね。

(運輸社長) 例え与えられた業務としての仕事であっても、達成感があれば、プロセスにおけるしんどさなんていうのは、帳消しになってしまうと思います。もちろん体を壊したらダメで健康第一なのは言うまでもないことなんですけど、精神的な健康も含めて、例えハードワークであるけど、そこに働きがいがあって、果実として得られる達成感があれば、それも一つ自分の時間だと言えらると思うのです。

ただ単にサラリーマン、あるいは会社人間としていやいや働くのではなく、担当している業務が面白ければ、あるいはその中で楽しみがあれば、「己の楽しみ」というか、あるいは得られる果実としての「達成感の積み重ね」があると、それはそれですごい自分の糧になるんじゃないかなと思います。

だから是非、是非、そういう意味では、常に申し上げているのですが、「**そうあれかし**」と思って業務に取り組んでいただければ有難いと。

(会長) 今お話しいただいたように「働きがい」「達成感」というキーワードをぜひ意識して頂きたいということですね。

### 産業界から見た大阪大学大学院工学研究科へ望むこと



(会長) 企業経営者として、経営の基本やこれから企業を担う人々への望まれることなどについてお話を伺いましたが、それでは、ご卒業されました母校の大阪大学大学院工学研究科・工学部に、外部から見られて、こうあって欲しいというような望まれることがあれば、期待も込めてお話しいただけますか。

(運輸社長) そうですね、期待を込めて思うのは、たまたま工学研究科の経営にご意見を申し上げる立場にもさせていただき、工学研究科の運営状況について知り得た中で、これまでの成し遂げてこられた「らしさ」、すなわち、各国立大学の中での勢力図のようなものは無視できないと思うものの、大阪大学の工学部としてこれまで構築された特徴ある取組を大切にしていきたい。大阪大学大学院工学研究科の「阪大らしさ」、例えば、産学連携での企業との付き合いやネットワークなどの多様性を大事にし、特に大阪の特徴にこだわるわけではないのですが、大阪商人としての DNA かも知れないのですが、あまり官には媚びない、迎合しないという気質「大阪大学工学部らしさ」を期待したいですね。それが、教職員の皆さん、更には学生さんも意気を感じてやっていただくことで、次なる新しい展開に活動につながることを期待したいですね。

既にいろいろな分野や観点にチャレンジングな活動をしておられることは十分に承知の上ではありますが、より一層「らしさ」を求めた展開を期待いたします。

(会長) いまお話しいただいた「大阪大学工学部らしさ」を構成員がいかに意識することが大切であることは理解できまし、運営していく上でも大きなポイントと感じます。

### 新しい時代への今後のあり方と期待

(会長) このような大学の動きと共に、現在の議論で、「ニューノーマル社会」と表現されるような新しい時代がやってくる、あるいは求められているような議論が多くあるのですが、このような将来の動きを見たときに、若い人々へ、このようなことを意識して目指した方がよいのではないかなどご助言や期待をお話しいただけますか。

(運輸社長) うーん、どういう風に日本が変わっていくのが難しく、一般論的にはなるうかと思いますが、やはり問題は、もう既に労働人口の減少が生じていて、少子高齢化などと 20 年来いわれているにもかかわらず、昨今少しは具体的な対策が講じられてはいるものの、生産労働力が爆発的に増えるわけではないでしょう。その中で、一体、グローバルなところで日本経済がどう動いていくのか、実際ここ十数年以上は自動車業界が引っ張っておられましたが、ある意味、基盤技術などの基盤分野によっては、我が国の強みを出されてグローバルに活躍されているところもありますので、まさにその土台を大切に、大阪大学もグローバルな状況を見据えた上での研究開発を行っていただき、それを担う人材養成に力を発揮していただきたい。

そのような観点での工学の進歩の議論も必要ではないでしょうか。勿論、そのような観点から産官学が議論を進めていかなければならず、我が国の「国力」「経済力」を高めることを期待します。

(会長) お話のように我が国の今後のあり方で、国際的な競争力を高めるためにも、若い力に期待するところが大きいかと思います。

ところで、我が国の「インフラの劣化」が激しいように感じるのですが、国力を維持するという意味での大きな課題といえると感じます。土木関係のお仕事ということで、どのようにお考えでしょうか。

(運輸社長) おっしゃるとおりで、結局、構造体や構造物、もっと大きな意味で社会インフラについては、振り返れば第2次世界大戦後からの復興で高度成長期に造られたインフラが、もう既に老朽化、あるいは耐用年数を超えているというのも客観的な事実です。もう一点、地球環境の変化に伴う災害の激甚化、その背景にある線状降水帯などのような気象の変化につながっているといわれる地球の温暖化に伴う事象が見られる中で、国民生活の安心・安全を担保していくためには、間違いなく**リニューアルの必要性**があり、災害対応の施策は不可欠といえます。本当に、社会変容に寄り添うため、ある意味政治の世界とも密接に関係しつつ、どう担保していくのかが問われているでしょうね。

それと共に、私どもの建設業界としては、間違いなくやってくる首都圏直下型地震とか、東南海地震に対してどうきちんと備え、また、その後の復興など、国家としての「BCP」にどれだけ突っ込んで議論し、対策を実行していくかが大きな課題と認識しております。

それとここ1年の社会現象からは、台湾有事のような国際社会の不安定が問題で、国連の常任理事国が侵略戦争を仕掛けることがまかり通るような秩序の崩壊が見られる中であって、国として「なりわい」をどう考えていくのかが課題で、例えば私どもも台湾で事業をしており、何かの時にどのように対応するのかの検討を進めなければならない状況で、数年前までは考えられませんでした。

やはり、日本全体としてのBCPの議論が進むべきで、また、個社としてのBCPも確立しておくことは避けられないでしょう。

(会長) 確かに我が国のBCPの策定は大きな課題であると共に、インフラの充実という点では大林組さんのような建設業の果たす役割が大きい訳ですので、今後のご活躍・ご尽力を期待申し上げます。

## おわりに：平常心是道

(会長) 長時間にわたってお時間をちょうだいいたし、いろいろとお話をお伺いいたしましたが、最後に運輸社長様の趣味や、大切にしておられる「座右の銘」があればお話しくいただけますか。

(運輸社長) 特に特定の趣味というのはないのですが、本来、食事をし、お酒を飲むのが大好きで、家族とともに楽しい時間を過ごすのが、最大の安らぎです。週末には奈良の自宅に帰り食事もし、また直ぐ近くに住む子供や孫達と楽しい時間を過ごすことが、趣味というよりは、ある意味最大の楽しみです。

(運輸社長) 座右の銘というほどではないのですが、大切にしている言葉に、禅宗の言葉で、読み方はいろいろあるようですが、

### 「平常心是道」

をいつも挙げています。

「平常心」は一般的な読みの平常心(へいじょうしん)でなくて、禅宗的には「びょうじょうしん」と呼ばれているのですが。大学時代の夏に東吉野村(奈良県)の禅寺に逗留させてもらったときに、その住職さんに色紙に書いてもらいました。

「平常心」は、俗にいわれている「へいじょうしん」の意味でなく、しんどいときはしんどく、苦しいときは苦しいということで、しんどくて苦しいときにそうでないと振る舞うことでなく、あるがままに生きることが平常心で、これが禅宗の「道」との教えだとお聞きしています。なるほどなあと思いますよね。しんどいときはしんどいということで楽になることもあり、そのとき無理をするような、逆らっているときは得てしてうまく行かないものです。是非、平常で過ごし、事業経営に携わりたいものです。

(会長) それでは本日は貴重なお話を長時間にわたっていただきましたが、同窓会としてもますますのご活躍を祈念しております。

本日は誠にありがとうございました。



#### (参考)

蓮輪賢治 代表取締役社長 兼 CEO 様 経歴

1953年11月	誕生，大阪府出身
1977年3月	大阪大学工学部 土木工学科卒
1977年4月	株式会社大林組入社
2007年6月	株式会社大林組 土木本部本部長室長
2010年4月	株式会社大林組 執行役員 東京本店土木事業部担任副事業部長
2011年4月	株式会社大林組 技術本部副本部長
2012年10月	株式会社大林組 常務執行役員
2014年10月	株式会社大林組 テクノ事業創成本部長
2015年6月	株式会社大林組 取締役
2016年4月	株式会社大林組 専務執行役員
2018年3月	株式会社大林組 代表取締役社長
2023年4月	株式会社大林組 代表取締役社長 兼 CEO(現任)

#### 【註】

「平常心是道(びょうじょうしんぜどう 又は、へいじょうしんこれどう)」

この言葉の由来は中国南梁時代の無門慧開(1183 - 1260)によって編まれた仏教書、または禅書・公案集と呼ばれる著作にある故事。

これは、禅書の公案集「無門関」の第一九則に出てくるもので、中国唐代の禅僧である趙州禅師が、師の南泉禅師に「道とはどのようなものですか」と問うたのに対して、南泉禅師は、『平常心是道』と答えたという。

この『平常心』は、一般的には「びょうじょうしん」とは読まずに「へいじょうしん」と読まれるが、意味としては、「普段通りに平静な心」です。平常心を保ち、何にもとらわれない心そのものが『道』であるという教えです。禅問答でいう『平常心』は、日常ではたらく心のあり方であり、日常の行動、「あるがまま」の日常生活全体を指し、それが『道』ということになるという。

#### 「無門関」第19則：

趙州和尚が師の南泉和尚に「如何是道（道とはどんなものでしょう）？」と尋ねた。

その答えが「平常心是道（ふだんの心、そのものが道である）」と答えた。

※ここで言うところの「道」とは仏道である。

趙州「その心とはどのようにしてつかむことができるのでしょうか」

南泉「つかもうとすれども、つかむことはできない。」

趙州「つかむことができなければそれは道ではないのでは」

南泉「道は考えて理解できない。しかし、わからないといってしまうこともできない。考えて分かるのであればそれは妄想である。わからないものであればまったく意味のない事になってしまう。」

南泉「理解できる理解できないという分別を離れると自ずからそこに道が現れる。まるで澄み切った秋空の如く、分別を入れる余地はまったくない。」

趙州「なるほど」

趙州はその答えを聞いて悟ったという・・・。

（清岸寺HPより）

#### 【インタビュー後記】

インタビューは、この1月に新しい日本生命淀屋橋ビルに移られた株式会社大林組の大阪本店で行わせていただいた。本来の品川での本社でなく、大阪に来られる機会があって大阪本社でインタビューさせていただきました。この大阪本社は、事務体制でも革新的な形を取られていて、自分の定まった席を持たず、書類はロッカーに収めて帰り、入社時に書類を持ち出し、自ら必要な適当な席に着くという、新しい革新的な事務体制が採られている。

インタビューは、前もつての特段の内容についてのお願ひもせず、当方から話題を提供する形で進めさせていただきました。特に同窓会から、現在ご活躍の同窓生へのインタビューということで、内容的には、企業代表者への企業経営の実体に関する話題という経済誌のインタビューとは異なり、同窓生として、事業経営者へ進まれた歩みなどに重点をおいた内容といたしました。

蓮輪社長様は、インタビューに気軽に応じていただき、その話し方や内容について、実に誠実に語り口の優しさを感じ、いろいろな観点からのお話をいただきました。やはり大切にされていることは、経営のみならず生活においても「バランス」感覚ということで、話の端々にバランスを配慮したコメントをいただいたと感じております。

ご自身が座右の銘としてあげていただいた「平常心是道」は、まさに平常心の大切さと共に、自らのいまを見つめた判断の重要性を考えられているものと感じました。

インタビューでは、まだまだ十分に蓮輪社長様の人間性を引き出すところまで入っておりませんが、「人間力の高さ」を十分に感じていただければ幸いです。

（大阪大学工業会 会長 豊田 政男）